

多摩川先人館

[先人No.8] 多摩川の文豪

中里介山 なかざとかいざん (1885～1944)

大作「大菩薩峠」の作者・中里介山（なかざとかいざん）。その物語は、多摩川の水源の一つ大菩薩峠[*1]から始まります。

多摩川流域で生まれ育った介山は、その風景を小説の中でも多用しました。



中里介山

中里介山・本名弥之助（やのすけ）は、明治18（1885）年4月4日、神奈川県西多摩郡羽村（現在の東京都羽村市）で、精米業者を営む中里家の次男として生まれました。

当時の羽村には、多摩川の水を玉川上水へ分水する「羽村堰[*2]」があり、水番所が置かれていました。

中里家もその水番所の隣にあり、母・ハナの実家も水番所陣屋でした。また、精米業を営む父・弥十郎は水車を持ち、後に介山はこれについて次の様に記しています。

- 余の幼い時、父は多摩川の沿岸で水車を営んで居った。余の親類にも友人にも水車が多いので、水車の響きは殊（こと）の外に懐かしい。暫（しばら）く竹（たたず）んで廻る車を見、杵の音を聞いて居る。

明治25（1892）年、介山が西多摩小学校尋常科3年生の時、経済不況の影響を受けた中里家は、土地を失い横須賀へ移住しました。

2年後の明治27（1894）年、介山は羽村に帰郷し、西多摩小学校高等科2年生の時、教員助手になりました。そして、補習などを目的とした「少年夜学会」を主宰し、羽村堰周辺の屋号や人名を織り交ぜた歌なども、唄わせていたそうです。



代用教員時代（後列の左）

この頃から介山は、少年雑誌「小国民」等への投稿を始めていましたが、社会主義運動にも関心を寄せ、反戦詩なども発表しています。

更に、キリスト教の指導者・松村介石[*3]の影響も受け、「介山」という号は、これが由来していると言われています。

「大菩薩峠」への道のり

明治31（1898）年、西多摩小学校高等科を卒業した介山は、上京して日本橋の電話交換局に勤務しながら独学を続けました。そして、明治

34（1901）年16歳の時に、準教員免許を取得、その後5年間教員を勤めました。

明治39（1906）年、「都（みやこ）新聞社」に転職した介山は、書評担当として働き始めますが、



明治42（1909）年、「羽村子」の名で連載をはじめた小説「氷の花」が、浅草蓬萊座（ほうらいざ）で上映されると、その後、次々に小説を発表しました。

そして、大正2（1913）年からは、「中里介山」の名で「大菩薩峠」の連載を始めるのです。

- 東に落ちる水は清かれ、西に流れる水も清かれと祈って菩薩の像を埋めた。
それが東に落つる水は多摩川となり、西に流るるは笛吹川となり、いずれも流れの←「も」じゃないの？末長く、人を潤ほし田を実らすと申伝えられています。

このように始まる「大菩薩峠」は、幕末を舞台に主人公「机龍之助」と、理想郷を追い求める人々の人間模様を描いた物語です。その中に介山は、生まれ故郷の多摩川周辺や、水車を度々登場させるのです。

たちまち人気となったこの小説は、「東京日日新聞」「読売新聞」他、数々の新聞でも連載され、映画化される程になりました。

理想郷を追い求める

都新聞社を退職した介山は、高尾山麓の千年榎の下に六畳二間の草庵「高尾山妙音谷草庵」を構えました。

これを期に、理想郷づくりに奔走しはじめます。

介山は、「大菩薩峠」の執筆を続けながら、理想の教育を追求する為の「隣人教室」を高尾に開校しました。ここでの3年余りの生活は、介山の生涯で最もびやかなものだった様ですが、ケーブルカーの敷設工事が始まると、その騒音に耐えられず、奥多摩へ移転しました。



そして、奥多摩沢井村（現在の青梅市沢井）の杉木立の中に、草庵「黒地藏文庫」を構えると、二俣尾（現在の青梅市二俣尾）に「隣人道場」などを建て、図書館や武道場として開放しました。

しかし、青梅鉄道（現在のJR青梅線）の延長工事により崖崩れが起こり、奥多摩での理想郷づくりも断念しました。

昭和3（1928）年、介山は次の理想郷を求め、生まれ故郷の羽村に約一町歩の農地を買って草庵を移築、「植民地」と名付けました。昭和5（1930）年5月、ここに「大菩薩峠記念館」を開館、更に、自給自足と塾教育を統一した吉田松陰[*4]の「松下村塾」にならった、「西隣村塾」を開校します。

しかしこの塾は、学校教育全盛の時代にそぐわず、半年で閉校してしまっただけです。

未完となった「大菩薩峠」

昭和16（1941）年、20巻目にあたる「大菩薩峠・椰子林の巻」が出版されました。この巻に介山は、自らを「百姓弥之助」として理想郷とともに登場させましたが、くしくも、この巻が最後となり「大菩薩峠」は未完の大作となったのです。

昭和19（1944）年、腸チフスに倒れ、西秋留（現在の東京都あきる野市）の病院で59歳の生涯を閉じました。

年号	西暦	月.日	年齢	略歴
明治18	1885	4.4		神奈川県西多摩郡羽村（現在の東京都羽村市）の中里家に次男・弥之助として誕生。
明治23	1890	4	5	西多摩小学校に入学。
明治25	1892		7	家族で横須賀に移住。
明治27	1894		9	羽村に帰郷、西多摩小学校尋常科4年に編入。
明治29	1896	4	11	教員助手となる。少年夜学会を開く。
明治30	1897		12	少年雑誌「小国民」に短編が掲載される。
明治31	1898	3	13	西多摩小学校高等科を卒業。日本橋浪花町電話交換局に勤務。
明治33	1900		15	電話交換手を退職。母校西多摩小学校の代用教員になる。
明治34	1901		16	準教員免許状を取得。
明治35	1902		17	西多摩小学校本科正教員検定に合格。
明治36	1903		18	西多摩小学校を退職。「平民新聞」に小説が佳作入選。
明治37	1904		19	東京府尋常小学校本科正教員免許状を取得。「平民新聞」に反戦詩を発表。
明治39	1906		21	都新聞社へ入社。エッセイ集「今人古人」を処女出版。
明治42	1909	7~8	24	都新聞社に処女作「氷の花」を連載。
明治43	1910		25	父・弥十郎他界（54歳）。都新聞に「高野の義人」を連載。
大正2	1913	9.12	28	都新聞に「大菩薩峠」を連載。
大正8	1919		34	都新聞を退社。
大正11	1922		37	高尾山妙音谷（現在の八王子市高尾町）に「妙音谷草庵」を構える。
大正13	1924		39	南多摩郡浅川村（八王子市廿里町付近）に「隣人学園」を開く。
大正14	1925		40	三田村沢井（現在の青梅市沢井）に、草庵「黒地藏文庫」を構える。
大正15	1926	3	41	御岳弘沢谷（現在の西多摩郡檜原村）に「小谷道場」を開く。
昭和2	1927		42	谷久保谷（現在の青梅市）に「八雲谷草庵」を構える。
昭和3	1928		43	二俣尾（現在の青梅市二俣尾）に「隣人道場」を開く。道場・草庵を羽村へ移す。
昭和5	1930		45	「西隣村塾」を開く。「大菩薩峠記念館」開館。
昭和16	1941		56	母ハナ他界（82歳）。「大菩薩峠」未完の最終巻出版。
昭和19	1944	4.28	59	59歳の生涯をとじる。

羽村市郷土博物館

介山が生まれ育った羽村には、「羽村市郷土博物館」が建てられています。中里介山に関する展示も充実していて、館外には、廃館になった「大菩薩峠記念館」の赤門が移築展示されています。



*1 大菩薩峠（だいぼさつとうげ）

．．．山梨県北東部にある標高1,897mの峠。

*2 羽村堰（はむらせき）

．．．玉川上水の取水口に設置された堰。詳しくは「橋の写真館」へ。

*3 松村介石（まつむらかいせき）

．．．1859-1939年キリスト教指導者。儒教とキリスト教を結合して、新しいキリスト教を説く。

*4 吉田松陰（よしだしょういん）

．．．1830-1859年幕末の思想家。萩（山口県北部）に私塾「松下村塾」を開き、高杉晋作・伊藤博文など明治維新に活躍した多くの人材を養成。